2018 年　日本保育学会第 71 回大会発表

異年齢保育卒園生の追跡調査

社会福祉法人光の園　発寒ひかり保育園　副主任保育士　家村　維人　園長　吉田　行男 (注 1)

はじめに

近年、異年齢保育への関心が高まり、実践が広がりつつある。当園では、「みんなきょうだい大きな家族」をテーマに、共に生き共に育ちあう豊かな人間関係と、向社会性や自立心など豊かな人間性の育成を目指して、20 年前から異年齢保育に取り組んできた。特に、2002 年以来、毎日の生活における異年齢小グループを基本とする保育（乳児は 0 歳後半～2 歳前半、幼児は 2 歳後半～5 歳）を実践してから、かつての地域社会の異年齢子ども集団に見られた重層的な人間関係が再現され、子どもの心の発達に良い効果があると実感した。

そこで異年齢保育が子どもの心の発達に及ぼす影響について、まず同年齢保育と異年齢保育双方の子どもの相互交渉についての観察をもとにした実証的研究を行った（吉田 2009、2010）(注 2)。

次いで、当園卒園生の卒園後の心の発達についての追跡調査を行い、異年齢保育が子どもたちのその後の人格形成にどのような影響を与えたかについて調査・分析した（家村・吉田 2013、2014）(注 3)。

さらに、過去 2 回の比較追跡調査を、より掘り下げるための 2 つの仮説に基づいた比較分析調査を行った（家村・吉田 2016）(注 4)。

今回はそれらを整理するとともに、3 年前の 2015 年より始めた 0 歳からの異年齢保育と、それを経験した卒園生の姿も踏まえて報告したい。

Ⅰ　調査の目的

本研究は、当園における種々配慮された異年齢保育（幅広い年齢層、主体性の尊重、お世話を強制しない、毎日の生活の時間帯で、同年齢保育も保障する等）の実践が、卒園生の卒園後の心の発達と人格形成に及ぼす影響について明らかにする。

Ⅱ　調査の対象と方法

①　保護者・学校教員へのアンケートと聞き取り調査（吉田・家村 2013）
②　当園の卒園生ではない小・中学生の保護者へのアンケートと聞き取り調査（家村 2014）
③　当園を卒園した中学生と、そうではない中学生の在園児と関わる姿の観察（家村・吉田 2016）
④　当園を含む 6 園の 5 歳児の聞き取り・アンケート調査（吉田・家村 2018）

Ⅲ　調査・観察の結果と考察

1　アンケート調査の結果と考察

前掲論文で使用された「相互交渉のカテゴリーとその内容」の質問項目について分析した。分析するにあたり、数字の処理に関しては同じ性質の回答をまとめて、関わりがみられるという回答と、関わりがみられないという回答に二極化して、当園卒園生の傾向を導き出した。

また、データの扱いについては次の配慮をした。異年齢保育と言っても、後述（P.14）のようにその効果が期待できない形態・方法論で実践している保育園・幼稚園も多く、今回はその確認を取れな

かったため、データとして採用しなかった。そこで、乳児・幼児ともに異年齢生活小グループで、子どもたちの主体性を尊重するなど、その効果を発揮するために種々配慮された異年齢保育を行っている当園と、年齢別保育を主とした保育園・幼稚園とを比較分析・考察した。

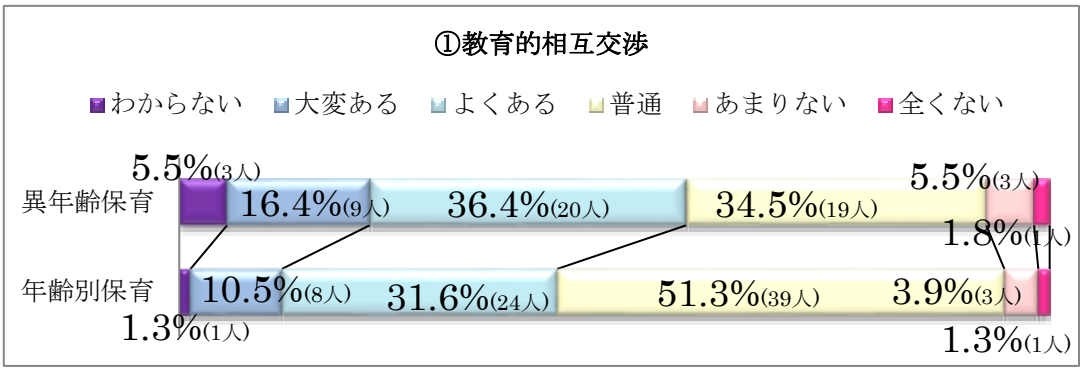
記述式アンケートは情報量が膨大なため、特徴的なもの、似た意見の多かったものを中心に、保護者回答の一部を紹介する。

保護者アンケート集計結果	小学生	中学生	合計
異年齢保育（当園）	35 人	20 人	55 人
年齢別保育（その他）	54 人	22 人	76 人

相互交渉（関わり）のカテゴリーとその内容

	カテゴリー名	具体的な内容
①	教育的相互交渉	遊びや生活や人間関係のルール・方法･技術などを教える。聞く・学ぶ。それらに伴う指示、注意、諭す、叱責、賞讃等とそれらへの反応等の関わり。
②	養護的相互交渉	食事･排泄･睡眠等の生理的欲求や、愛情･信頼等の心理的な欲求を受容的・親和的に充足する等の関わり。
③	愛着行動	特定の相手による強い情緒的結びつきが感じられる等の関わり。
④	協調的相互交渉	一緒に協力して仲良く遊ぶ。助け合う。ケンカの仲裁をする。他者に関心を持ち、他者を理解し･認め・受容する等の関わり。
⑤	競争的相互交渉	順番や優劣を競う。物を取り合う。自己主張の衝突で口げんかや力を行使してケンカする。訴え。プライドを傷つけられないために、他者の援助を断る等の関わり。
⑥	攻撃的相互交渉	いじめ・攻撃･排除、非難・中傷、悪意の告げ口、それらへの同調等の関わり。

（1）アンケート調査の結果



＜異年齢保育＞

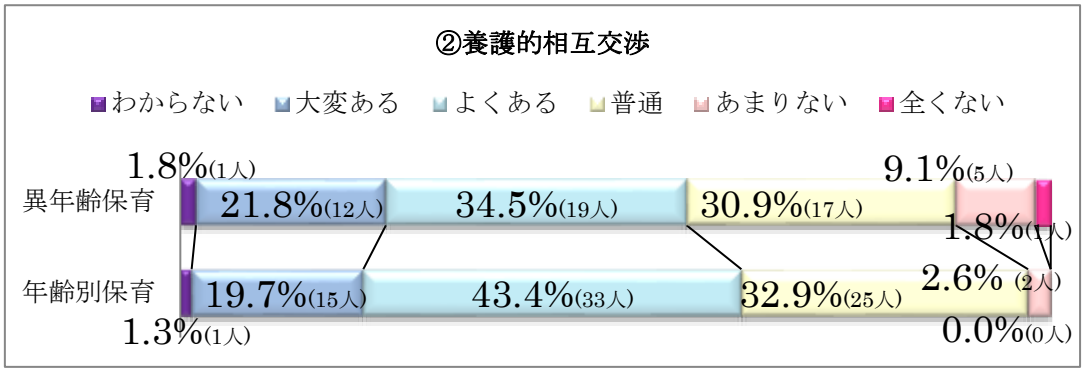
・年上の子に教えられ、自分も年下の子に教えていく様になるのだと思います。大人が言うより同年代や少し年上の子の意見を素直に聞く年頃であり、兄弟のいない子（我が家の様に）はそういう体験が出来ないので、異年齢保育の関係は大と思うし、ありがたかったと思っています（小 4 男児）。

・遊びのルールがわからない子に対し、違う言葉に置き換えて、わかりやすく説明する。それが同年齢・年上・年下に関係なくできる（小 5 男児）。

＜年齢別保育＞

・リーダーシップがあり、まとめる力があると先生に言われる事がたまにある（小 6 女児）。

・人前に立って話すことを嫌がらず、低学年の頃から今までクラスの中心にいるようで、担任の先生にはいつもその事言われる（小 6 男児）。



＜異年齢保育＞

・小さい子に対して（自分より下の子）は本当に自分の子どもとはいえ良くできたお兄ちゃんに見えます。異年齢保育の影響が大きいとひしひしと感じています。「かわいいけどくさいなぁ」と言いながらうんちをしたおむつを片付けている姿が（弟の）とてもたのもしいです（小 2 男児）。

・小さい子への接し方が上手。うちの子だけではなく、H 保育園卒園児のみんな優しく、安心してみていられる（小 4 女児）。

・年長時下の子のお世話をする事で小さい子にやさしく接するという事では、今だに同じです。どんなにやんちゃな子でも嫌がらずめんどうを見てくれるし小さい子にも好かれています。

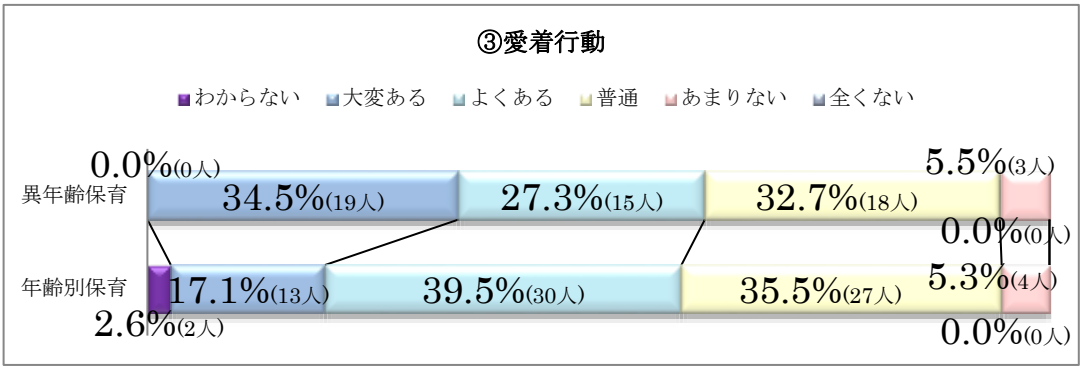
＜年齢別保育＞

・小さい子やできない子への支援は積極的だが、遊びのリーダー等の積極性は欠けているように思う（小 2 女児）。

・弟や妹にとても優しいお姉さん。保育園でというよりは家庭で身についていった気がする（小 1 女児）。

・リーダーシップがある。根性がある。下級生に対して優しい（小さな子が好き）（小 6 男児）。

・自分より小さい子を見ると、お世話したりあやしたりする場面は就学前からよく見られていた（中 2 男児）。



＜異年齢保育＞

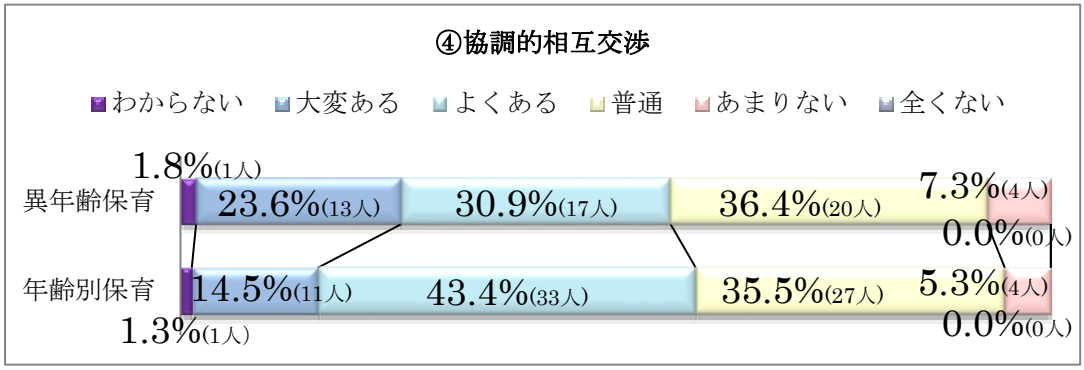
・お友達はたくさんおり、特にしたしい子もおります。一度したしくなった子とは、時間がたっても長くかわらないおつきあいを子供同士でしています。大きいお兄ちゃんがひさしぶりにあったら声をかけてくれたりと、良いお手本があったからかなとも思います（小３男児）。

・おじいちゃん、おばあちゃんと会うと、積極的に手伝いをしたり、話をしたり、優しい気持ちで接していると思います。また、転校した友達と連絡をとりあい、会う機会を作って交流を深めています（中１女児）。

＜年齢別保育＞

・幼少期から自分より小さい子のお世話やあやすことは好きだった。３人兄弟の中で一番あまえんぼうで、気付くと親の友人などに甘え、可愛がってもらっていた（小３女児）。

・年が離れているせいか、弟をとても可愛がっている。かまいすぎて少しうっとおしがられている（中２女児）。

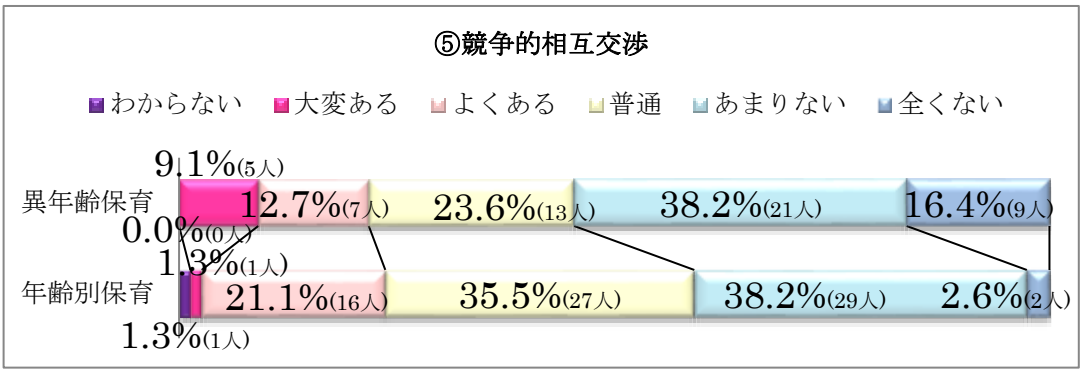


＜異年齢保育＞

・老若男女関係なくすぐに相手と打ちとけることができる姿には感心してしまいます。先生たちとのふれあいや、小さい子供達のお世話をする為に協力しあう、また、友達と毎日生活を共にする中でケンカをしたり、仲裁する事もあったし、仲なおりをして絆を強めるという様々な関わりがあって、自分と相

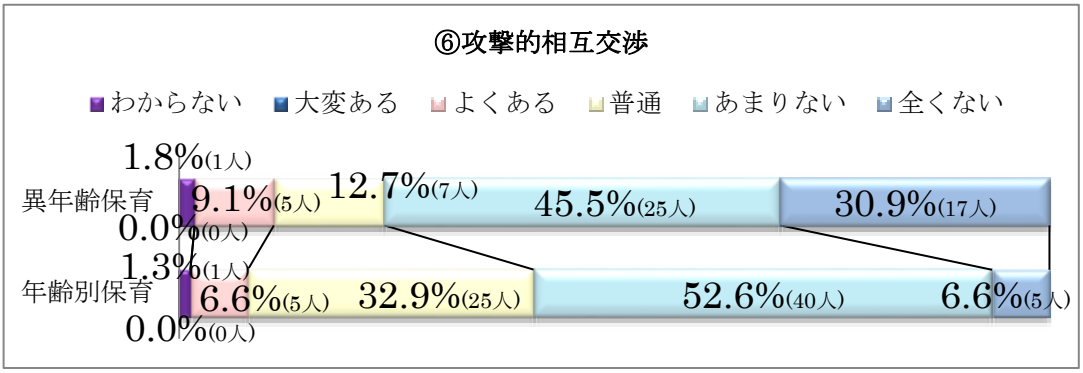
手のやりたい事が違っても相手を無理矢理引き入れる事はなく、「自分はこれがやりたいから」と相手に告げ、それでも相手に「一緒にやろう！」と言われて、「わかったよ」と受け入れる所を見た時は、あぁこういうのも保育園で生活する中で学んだ(身につけた？)ものなんだなと思いました(小２男児)。
・誰とでも、すぐに仲良くなれる性格なので、相手を受容する気持ちが広いのかなーと思います。苦手な友人とも距離をはかりながら、うまく付き合っているようです（中２男児)。

＜年齢別保育＞
・１人っ子の為か、他人とのコミュニケーション能力に欠ける所があるように思う（小６男児）。
・責任感が強い。コミュニケーションの能力が低い。下の子の面倒を見る事が多い（兄弟以外も)。少人数で遊ぶことを好む（小６男児)。
・長女なので、遊びや勉強を教えたりお世話する場面も多く、責任感は出てきていると感じる。仲の良い友だちや弟と遠慮のない発言でケンカにもなるが、すぐに仲直りしているので、コミュニケーションとして必要だと思う（小４女児)。
・周りの事は気にしない。マイペース（中３男児)。



＜異年齢保育＞
・基本的に人と争うことが好きではないと思いますが、自分が正しいと思った事には、はっきりと意見を言うと思います。ただ、話が平行線の状態になると「自分がひく」ことでその場を納める事が多いと思います（中１女児)。
・自己主張をあまりしない子なので（弟と違って）めったにケンカはしないです。物を取りあう前に「貸して」とか「次貸してあげるね」とか、ケンカになる前までケンカを回避しようと少しがんばっている所は異年齢保育の中で培ってきたものだと思います（小２男児)。
・めったにけんかはしないが、けんかにならないようにしているようです（小５女児)。

＜年齢別保育＞
・どちらかといえば中立的立場でいる事が多い。自分から何かを発信することはあまりないが、特に何も考えていないわけではない（小６男児）。



＜異年齢保育＞

・悪口を言っているような場面に居合わせた時は、話に加わらないようにしているようです。ただ、家で会話している際に、公平な立場で、その悪口（もめ事）に対して、「自分はこういうふうに思った」と話してくれることがあります（中２男児）。

・もともとおっとりとしたやさしい子で、人を悪く言ったり攻撃することはありません。自分がちがうと思うことはことわる力もついております。やっぱりたくさんの仲間やお兄さんの様子をみて、身についたものかもしれません（小３男児）。

＜年齢別保育＞

特に記述なし

（２）アンケート結果の考察

①教育的相互交渉が大変多い

異年齢保育（以下異年齢）の保護者の具体例の記述から、お世話、お手伝い、教えるといった言葉が多く、人に対して教育的な関わりが大変良く見られていることがわかる。異年齢によって大きい子から教えられた経験や、年下の子に教えるという関わりの中で育まれたのではないだろうか。肯定的な回答が半数以上にも及んでいる。

年齢別保育（以下年齢別）との比較では、「大変ある」「よくある」の合計値が、年齢別の 42.1%に対し、異年齢は 52.8%と、異年齢の方が 10.7%高くなっている。生活や遊び、人間関係のルール等を教えあったり学びあったりする姿が見られていると推測される。保護者の記述にも、そうした内容が多い。

②養護的相互交渉が多い

年齢別と比較してみると、異年齢の事例からは、養護的な関わりが多く記入されている。そこから読み取れるのは、小さい子に限らず、相手の気持ちになって考えたり、思いやる気持ちを持って養護を必要としている人に自然に、また、積極的に関わっているという事である。単に小さい子に対して優しくするだけではなく、深い愛情と受容の関わりもあり、保護者の記述からも異年齢にそうした姿が多く見られていることがうかがえる。

③愛着行動が大変多い

異年齢の、「妹のお世話をしてくれる」「くさいなあと言いながらおむつを替える」等といった具体例からは、愛着関係が十分に読み取れる。教育的・養護的・協調的な関わりの高さの中には、強い愛着行動が伴っていると想像される。

年齢別との比較では、「大変ある」が年齢別の 17.1%に対し、異年齢で 34.5%と、異年齢の方が 17.4%も高くなっていた。このことから、異年齢では特定の相手との愛情深い関わりや、お互いを思いやる心が育っていると思われる。

⑤　協調的相互交渉が多い

異年齢では、仲よく遊んだり、ケンカの仲裁をしたりするといった回答が多い。そうした結果からも、相手を寛容に受け入れ、共に考え行動に移すことができる社会性の高さと受容性を備えているといえよう。後述の競争的な関わりと攻撃的な関わりが少ないという結果からも、保育園～学童期問わず最も重要であろう良好な人間関係が形成されている様である。

年齢別との比較では、数値的に大きな差は見られていない。これは、アンケート調査の対象者を、スポーツ少年団や習い事等の場で求めた影響が反映されていると思われる。

⑤競争的相互交渉が大変少ない

異年齢の具体例からは、人と争う姿はあまり見ないという結果が出ている。もちろん、家族間での競争や、自己主張の強い場面が見られることもあるが、争う前に解決しようとしたり、争いごとを上手に避けようとする力が身についているようだ。社会性の高さとともに、相手の気持ちを受け入れる事の出来る受容性も大きく影響していると思う。

年齢別との比較では、「全くない」の数値が、年齢別で 2.6%に対し、異年齢は 16.4%と、異年齢保育の方が 13.8%高くなっている。優劣を競ったり物を取り合ったりせず、争いを好まない姿がうかがえる。一方で、「大変ある」の数値が年齢別で 1.3%、異年齢で 9.1%と、異年齢で若干高くなっている。前掲論文の中で、異年齢保育の中での競争的な関わりは稀であると述べていたが、当園でも年齢の活動の中ではそうした姿が若干見られていた。さらに、小・中学校の競争社会の影響を受けていたことも推測される。

蛇足ながら、同じ競争的関わりでも、切磋琢磨しお互いを高め合う場合と、自己の利益のみを求め弱肉強食的な競争の場合とでは、全く本質が異なる。(5) は、後者の意味での設問であることをお断りしておく。

⑥攻撃的相互交渉が全くない

異年齢の具体例からは、人と争うことが少ない事と同様に、攻撃的な行動も大変少ない事が読み取れる。具体例として問題行動を指摘されている子は極めて少なかった。

年齢別との比較では、顕著な差が表れた。「全くない」の数値が、年齢別で 6.6%に対し、異年齢が 30.9%と、異年齢の方が 24.3%高くなっていた。「あまりない」との合計値でも 17.2%高く、他者を傷つけたり攻撃したりしないという、自己抑制的態度が強く示唆されている。

２　聞き取り調査と行動観察の結果と考察

（１）聞き取り調査の結果

①当園卒園中学生へのインタビュー（対象者５名）

・小学校でのふれあい活動（異学年交流）の時、どの年齢の人ともやりやすかった。
・他の年齢の子と過ごしたことで、大きくなった時にどう関わったらいいのかわかった。
・ファミリー（異年齢小グループ）の子どもたちは、「保育園の家族」という感覚だった。
・お世話をする時には、相手の気持ちを考えて接しなければならないと思っていた。
・当園出身の子たちは、小さい子だけではなく、年上の人、大人の人ともコミュニケーションが上手に取れていると思う。

②職場体験の他園卒園中学生（対象者 15 名）

・どう遊んでよいのかわからなかった。
・子どもがいろいろなことをしていて大変だと思った。ハラハラした。
・最初は緊張したが、子どもたちから声をかけられほぐれた。
・非常に大変な仕事だと本当に実感した。
・転んだり、頭をぶつけたり、絶対に目を離さないように気を付けた。
・お昼寝の時にあまり寝ない子もいて大変だった。
・「人見知りするのかな」などの不安もあった。
・すごく大変だったが、楽しくてとてもやりがいのある仕事だと思う。
・小さい子と接するのは初めてだった。私のひざの取り合いになって、対応するのが難しかった。
・（保育士に）「小さい子たちとはこう接するんだよ」と教えてもらった。
・小さい子たちは、絵本や積み木などで遊ぶことが好きなんだということがわかった。
・おむつの変え方なども教えてもらった。
・子どもたちから「あそぼ～」など話しかけてくれたおかげで、保育園とはこういう所なんだと知ることができた。
・意外と子どもの方が相手の心を読みとる力があるのかなと印象に残った。

③「お兄さん・お姉さん先生」（保育参加）(注5) **の卒園小学生**（対象者 30 名）

・保育園の先生になった気持ちがする。
・小さい子と触れ合うのが楽しい。
・先生のお手伝いをしたくて参加している。もちろん小さい子もかわいい。
・ファミリーの子を、たぶんきょうだいみたいに思っている。
・楽しい。可愛い。また来たい。
・「一緒に給食食べよう」とか、「トントンして」とか声をかけられるとうれしい。
・「ありがとう」と笑顔で言われた時に、また来たいと思う。
・保育園の子たちが、会うたびに大きくなっていて、それを感じるのもうれしく思う。
・（赤ちゃんに）よだれを付けられたりするけど気にならない。なれっこだから。

④「異年齢同窓会」の卒園中学生・高校生（対象者 24 名）

・面倒見が良くなった。
・人のことを思いやれるようになった。
・知らない子にも恥ずかしがらずに話しかけられる。
・年下の人に優しくするということを学んだ。年下の子の面倒を見るのが楽しい。
・遊びの内容を小さい子に合わせられる。
・知らない人のところに入っても、普通にしゃべれる。
・（卒園してからも）ファミリーのつながりを感じる。
・（当園卒園生には）我慢強い子が多い。
・（当育園卒園生には）明るい子が多い。
・（当園卒園生は）コミュニケーション能力が高い。
＜将来の結婚・子育てについて＞
・子育ての不安はない。自信がある。
・失敗したことを教えてあげられる。
・不安はない。保育園で小さい子たちと接していたから。

⑤卒園生の保護者（対象者 5 名）

・自分が幼少期に長い期間過ごした場所に、自ら「何かお手伝いしたい。何か役に立ちたい。恩返しをしたい」と思いお兄さん・お姉さん先生を志願する姿は、親として感慨深いものがある。
・家に帰ってくると、とても満足げに楽しかった話、懐かしかった話、給食が美味しかった話などを延々としてくれる。
・保育園効果か、小さい子をとても可愛がり、小学校からのお友だちより小さい子の扱いが慣れていると思う。
・人見知りしない。
・世話好きなところとかは影響あるかも知れない。
・保育園の影響かはわからないが、年上に会っても動じない。下の年齢の子ともすぐに仲良くなれる。

⑥他園経験保育士を含む、当園保育士（対象者 22 名）

＜お兄さん・お姉さん先生＞
・ファミリーに入ることで、懐かしさを覚え、普通の会話や行動がお世話になっている。
・声のかけ方や遊びの誘い方、無理強いは絶対にしないで子どもを引き寄せている姿がお母さんの様で、保育士も勉強になるほどだった。
・新 1 年生の子は、「ただいま」と保育園に帰ってきたような感じを出して懐かしんでいる。高学年くらいになると、「お手伝いしよう」という姿が見られる。
・その後の自分の成長を見てもらいたいという気持ちがあるかもしれない。学校の話や近況報告を喜んでしてくれる。

・小学校ではお世話される立場だが、園にくれば下の子をお世話できる。自己発揮の場となっているのではないか。
・小さい頃の気持ちに戻れていたのではないか。本当に楽しんでいたと聞き、保育士も嬉しく思った。
＜異年齢同窓会＞
・子どもたちや保育士に対して人見知りや変な緊張をせず、色々なことをやってくれる。
・学校も学年も違う、久しぶりに会う子もたくさんいる中で、誰とでも仲よく遊べている印象だった。
・話しかけると朗らかに対応してくれる。対人関係は良好そうに感じた。
・知らない先生たちの所にいても物怖じしないという面はあるかも知れない。
・大人としゃべることに抵抗する年齢だと思うが、人懐っこい傾向は感じる。

（2）行動観察の結果

①職場体験の他園卒園中学生（対象者 15 名）

・大半は自分から積極的に子どもと関わろうとする姿はない。
・どうしたらよいかわからない様子。
・園児に誘われてついていく。
・お世話をしているというよりは、言われて動いている。
・立っているだけの時があった。
・赤ちゃんとの関わり方を保育士に教えてもらいながら関わっていた。
・きっかけを与えられればスムーズに関わっている。
・子どもに慣れていない感じがあり、どう関わっていいかわからずにいるが、少しずつ掴んでいく様子がある。
・「赤ちゃんと関わったことがある」と答えた生徒は、たいてい上手に関わっている。同じ目線になって話しかけている生徒が多い。
・おっかなびっくりだったが、生後 2 か月の子を抱っこしていた。
・「かわいい」とは言ってくれたが、抱っこまではしなかった。
・丁寧に関わってたが、目線を合わせるまではしていなかった。
・「はずかしい」と言っていた。
・子どもに対しては関わるが、保育士に質問したり話しかけたりすることは無く消極的。

②「お兄さん・お姉さん先生」（保育参加）の卒園小学生（対象者 30 名）

・赤ちゃんをあやしたり、小さい子を抱っこしたりして可愛がっている。
・赤ちゃんや小さい子を安全なところへ連れて行ったり、ケガをしないように遊びの援助をしたり、安全の見守りをしている。
・率先して小さい子の手をつないでリードしてくれる。
・小さい子のケンカの仲裁をしている。子どもたちは、保育士より素直に聞く。
・小さい子が作った作品を見せに来ると、「すごいね」など必ず声をかけて反応している。

・自分の知っている子がいなくても、一緒に遊びを楽しんでいる。
・在園児の甘えを受け止めてくれる。
・お散歩や給食の準備を手伝ってくれる。
・離乳食を食べさせてくれる。
・スプーンの使い方を教えたり、手を添えたり、小さい子に対して「スプーン使えるようになったんだね」と喜んでいる。
・お弁当箱のごはん粒を集めて食べさせてくれる。
・給食の片づけを、その子が自分でできるように上手に促し、見守っている。
・赤ちゃんや小さい子をトントンして寝かしつける。

③「異年齢同窓会」の卒園中学生・高校生（対象者 24 名）

・子どもたちに積極的で上手に関わってくれていた。
・物怖じせず子どもを抱っこしていて、慣れている。
・小さい子に慕われ、好かれる雰囲気を出していた。
・お母さんのように関わっている。
・小さい子に関わりたくて仕方ない様子。何度も「かわいい」と言っていた。
・中学生が在園児とリレーを本気でやって喜ばせていた。
・夕方、友だちがお迎えで帰ったため淋しそうにしていた子に、目線を合わせて変顔で笑わせていた。
・人見知りして泣いていた子に対して、関わり方を知っていたようで、ちょっと距離を置いて見守っていた。
・たくさん抱っこしてくれた。お互いに温もりを喜んでいたように思う。
・会ったことのない保育士、久しぶりに会った保育士に対しても人見知りがない。
・おっかなびっくり関わっている感じはせず、慣れている。
・職場体験の生徒と比較すると、構えることなくすぐに打ち解ける。

（3）卒園生への聞き取りから

どの子も在園中異なった年齢の子どもたちと遊んだ思い出が豊富ではっきりしていた。また、小学校での異学年交流の場に抵抗なく参加できたことや、自然に年下の子に教えたり面倒をみたりすることができたという声もあった。中でも、卒園児自身が、他園出身の子どもたちと比較した上で、当園卒園児のコミュニケーション能力の高さや向社会性・自立心の高さなどの傾向をはっきりと認識して語っていたことである。その姿そのものが、この傾向を証明しているように思わた。

（4）行動観察の比較から

職場体験の中学生の中には、乳幼児との接点がほとんどないまま参加する学生が多く、声のかけ方や遊び方など、関わり方がわからず見ているだけという姿がある。保育士からの促しや、子どもたちに誘われ行動し始めるが、不慣れな乳幼児との関わりの中で、怪我や人見知りに気を遣い、緊張しながら関わる様子が伝わってくる。

当園の卒園生たちは、自分の卒園した保育園ということもあるだろうが、物怖じすることなくす

ぐに子どもたちと関わり始め、赤ちゃんのお世話をしたり、大きい子たちの遊び相手をしたり、時にいけないことを注意したり、保育士の手伝いを進んで行うなど、積極的な姿が頻繁にみられる。その様子はまさに「保育士」さながらである。

また、職場体験の中学生は、緊張もあり子どもたちに対して消極的な姿勢が目立つ。保育士に対しても、積極的に質問をしたり、話しかけたりすることは少なく、指示されて初めて動いている。職場体験という性質上、保育士という仕事に対して「大変だった」「遊び方がわかった」「ケガをさせないように注意した」といった感想が聞かれたが、子どもたちと関わることへの喜びの声は、「可愛かった」などありきたりなものが多い。

それに対し、当園の卒園生たちは、自主的・主体的に「お兄さん・お姉さん先生」や「異年齢同窓会」に参加し、小さい子をお世話したり、一緒に遊んだりするなど、積極的に子どもたちと関っている。時には対等に真剣勝負を挑んだり、乳幼児との触れ合いを心から喜び楽しんでいる。さらに、誰に対しても物怖じせず、人懐っこい印象を与えていることが、保育士たちの声からうかがえる。

（5）保育士への聞き取りから

当園の保育士たちと、「お兄さん・お姉さん先生」での卒園生の姿について分析・考察している中で、新たに気付いたことがあった。当園の卒園生は、「自己肯定感が高いのではないか」という点についてである。

卒園生たちは、卒園した後も自主的・主体的に「お兄さん・お姉さん先生」に参加して保育園時代の体験・関係を継続していく。純粋に子どもたちとの触れ合いや成長を喜んだり、自身の学校の話や近況報告をしたりする中で、子どもたちや保育士に会いに来てくれたことや、遊んでくれたこと、お世話してくれたことを喜んでもらい、「また来たい」と自分の存在意義を感じていることなどが、これまでの観察や調査の結果からうかがえた。特に、2015 年より 0 歳からの異年齢保育を始めてからは、参加者が年々増加している。当園の保育士たちも、「自分の成長を見て喜んでもらいたいのではないか」「お世話が自己発揮の場となっているのではないか」それらが「自己肯定感につながっているのではないか」と推測したのである。

Ⅳ　総括的考察

1　心の発達の維持・伸長

前掲論文では、「以上の考察の結果、年齢別保育と比べて異年齢保育は、子どもたちの向社会性、愛着関係、受容性、自立心をより豊かに育んでいるとの結論に達した。」と結論づけている（2010 年日本保育学会第 36 回大会の発表）。

アンケート調査の結果や、保護者の具体例と卒園児からの聞き取り調査からも、当園の異年齢保育を体験した卒園児たちは、次の点でより特徴的な姿を見せていると思われる。すなわち、教育的・養護的な関わりから向社会性が、特定の相手との愛情深い関わりを築くことができるという愛着行動が、そして、協力したり助け合ったりする中で、相手を理解し受け入れる受容性が高いということである。中でも、競争的・攻撃的な関わりの少なさが顕著であることから、相手を信頼・尊重し、自律的に抑制的な態度をとることのできる自立心が育まれていると考えられる。

2　高い養育性

当園の子どもたちの高い養育性は、日々①保育士を養育者のモデルとし、②異年齢保育を基盤とした子育て文化と、③その共生的社会で過ごす中で、自ずと形成されてきた養育性（養護的・教育的関

わり、愛着関係、受容性）から生み出される姿ではないかと考えられる。

子育て不安や子どもへの虐待等、今日の子育て問題の大きな要因の一つとして、若者の養育性形成不全の問題が指摘されている（陳 2007）。H 保育園の卒園生の在園児への関わりや発言、中高生の結婚・子育てへの前向きな発言からは、保育園生活で形成されてきた養育性が、その後、様々な経験を経ながらも、維持・伸長し、発揮されていることが伺えた。

3　高いコミュニケーション能力

当園の多様で重層的な人間関係においては、子どもたちは時に様々な葛藤を経験する。その中で、人間関係を調整し、相手を信頼・尊重するようになり、協調的・平和的な解決へと導く手段（コミュニケーション能力）と人格（受容性・協調性・自立心）を獲得していると考えられる。それらは、養育性同様、卒園後も様々な経験をしていく中でさらに伸長していると思われる。それにしても、卒園生たち自身（複数）の口から、当園卒園生の傾向として、「コミュニケーション能力が高い」との発言が出ていることは、大変注目される。

4　新たな注目点―自己肯定感の醸成

愛情に満ちた家庭的な保育の中で、下の子は保育士や年上の子に可愛がられ、お世話されることを喜んでいる。上の子は、自発的な養育的関わりが下の子に喜ばれ、そして役立っている。それを保育士に褒められ、感謝され、その手助けになっていることを自覚する。すなわち、自己有用感である。その喜びは大きい。ますますやり甲斐を感じる。これらの経験の積み重ねの中で自己肯定感が醸成されているのではないかと推測している。

同年齢保育と 0 歳児からの異年齢保育における 5 歳児同士の比較アンケート調査の結果からも、主に自己有用感についてかなりの優位差が出た。

（表 4）　　自己有用感についての比較（5 歳児よりの聞き取りアンケート）

質問　/　回答	同年齢保育	0 歳からの 異年齢保育
「赤ちゃん（0 歳児）のお世話をしたり遊んだりしたことはありますか」		
・　たくさんある	37.3%	68.8%
・　少しある	28.0%	22.9%
「それはなぜですか」		
・　喜んでくれるから	13.3%	64.6%
・　泣いているときなどかわいそうだから	5.3%	60.4%
・　役に立ちたいから	6.7%	54.2%
・　助けたいから	10.7%	47.9%
・　親や先生のお手伝いをしたいから	14.7%	41.7%
・　頼りにされているから	6.7%	35.4%
・　可愛いから	48.0%	79.2%
・　自分も年上の子にしてもらっていたから	5.3%	39.6%
・　親や先生に頼まれるから	4.0%	25.0%
「自分は周りの人から褒められることはありますか」		
・　たくさん褒められる	41.3%	47.9%
・　少し褒められる	45.3%	39.6%

Ⅴ　結論

1　高い養育性とコミュニケーション能力

当園の、種々配慮された異年齢保育における複雑で重層的な人間関係（2009、吉田）の中で身につけた高い養育性とコミュニケーション能力は、卒園した後も、様々な経験をしていく中で、更に維持・伸長し、発揮していると思われる。

2　平和的・自立的な人格の形成

子どもの成長・発達にとって、ケンカ等様々な葛藤の体験は貴重である。複雑で重層的な人間関係の中で沢山の葛藤を体験しつつも、他者との強い愛着関係を形成し、教え合ったり助け合ったりしながら社会性を身につけ、相手を受け入れる自立した人間が育まれたのではないかと考える。中でも、日本の学校における極めて高い競争的関係（雰囲気）の中でも、否定的な競争や争いごとを好まず、相手を信頼・尊重し、物事を協調的・平和的に解決しようとする自立した人格が形成されつつあることをうかがわせる。

3　自己肯定感の醸成

保育園卒園後、学校生活の中で、卒園生たちも勉強や運動や自己表現力の優劣などで比較される等、葛藤を抱えることが多くなり、自己肯定感も低くなりがちになることが予想される。当園の卒園生たちは、保育園時代の慕いしたわれ、頼りたよられる「きょうだい」のような関係を継続していく中で、在園中に醸成してきたと推測される自己有用感・自己肯定感を、さらに高めているのではないかと思われる。

4　異年齢保育の実践条件の重要性

もちろんこうした幼少期の保育環境の違いだけで大きな差がでる訳ではなく、家庭環境や小・中学校での生活など様々な要素が関わってくる。はっきりとそれが乳幼児期の影響とは言えないだろう。

当園や他園での多年の経験から、同じ「異年齢保育」と称しても、次のような内容・方法論であれば、多くの成果は望めない。①年齢別クラスを主としながら定期的に異年齢交流をする場合、②多人数で保育士主導の一斉・集団による異年齢活動の場合、③身辺自立がほぼ完了したお世話されたくない 3 歳児から 5 歳児のグループによる活動や生活の場合、④毎日一日中、生活も活動も異年齢で過ごし、年上の子のストレスが蓄積されてしまう場合、⑤特に、年上の子に年下の子のお世話を強制したり、同趣旨で「きょうだい」と称するペアを組ませたりする場合は、成果よりも逆効果と言ってよい結果に陥ることが多い（研究会での報告あり）。

当園では、異年齢保育の実りある成果を得るため、次のような条件を設定している。①子どもの主体性を尊重する（関わりを強制しない）、②毎日の生活を共にする、③ 2 歳児以下の子どもを含める（お世話されたくない 3 歳児以上の構成は有害）、④年齢別のクラス活動を保障する、⑤生活・遊びの適切な環境構成等。2015 年からは、0 歳児から 5 歳児までの異年齢保育を始め、子どもたちの相互交渉はさらに豊かなものとなり、人間関係の深まりと広がりを見せるようになった。

Ⅵ　今後の課題

小・中学校との連携を深め、自己肯定感の高まりについて詳しく調査・分析し、より質の高い比較実証研究を継続することが課題である。

また、2015 年から始まった 0 歳児～5 歳児までの異年齢保育を経験した卒園生たちの、心の発達と人格形成に及ぼす影響について、それまでの異年齢保育との間にどのような差が見られるのか、引き続き

追跡していきたい。

おわりに

「お兄さん・お姉さんせんせい」に参加したある小学生は次のように語っていた。

『小さい子たちと触れ合うのが楽しい。弟や妹ともいっぱい触れ合っているけど、それとは別。保育園の子たちが会うたびに大きくなっていて、それを感じるのも嬉しく思う。』

また、別の小学生の保護者からは、次のような感想が寄せられた。

『学童保育に行っても楽しんでいますが、保育園の方がもっとずっと楽しいそうです。小学生になっても帰る場所、安心できる場所があるのはとても貴重な、ありがたいことだと思います。』

卒園して終わるのではなく、卒園してからも子どもたちと繋がっていることのできる当園の異年齢保育について、今後も実践を深めていきたい。

これまでの異年齢保育卒園生の追跡調査を進めるにあたり、多忙な中協力いただいた当園の全職員に、心よりお礼申し上げる。

注１　藤女子大学・札幌学院大学非常勤講師

注２　「異年齢保育と子どもの発達―年齢構成条件が異なる保育における相互交渉パターンの比較から―」（2008 北海道大学大学院教育学研究科　乳幼児発達論研究グループ　修士論文）

「異年齢生活小グループと子どもの発達―年齢別保育との比較から―」（2010 日本保育学会）

注３　「異年齢保育の追跡調査(1)(2)」（2013、2014 年北海道子ども学会）

注４　「異年齢保育の追跡調査(3)」（2016 年北海道子ども学会）

注５　当園を卒園した小・中学生が対象の保育参加受け入れシステム。事前に保護者が申込み、学校の平日の休みや長期休業期間などに来園し、園児たちのお世話をしたり、遊んだりしている。主に自分の過ごしたファミリー（異年齢グループ）に入ることが多い。1 日 5～6 人もの卒園生たちが参加することもある。

注６　本大会発表「0 歳児からの異年齢保育と子どもの発達(1)」参照